

## 発刊にあたり(2)

自動車人間工学は我が国の人間工学のなかでも最も早く研究会が生まれた領域の一つです(1962年に自動車技術会に自動車人間工学研究委員会が設立)。その一方、近年では人間工学・ヒューマンファクターに多くの関心が集まり、主催の学術講演会では人間に関係する演題がかなりの割合を占めることもあります。技術的な成熟と電子制御技術の発達から、あらためて人間のことを考えた自動車作りの機運が高まってきたといえます。これを確固たるものとして発展させていくためには、それを支える基盤の構築が必須であり、本ハンドブックはそのために大きな役割を果たすことができると考えています。

本ハンドブック「人間工学編」は我が国で初めての自動車人間工学のハンドブックになります。海外においても自動車人間工学を網羅した成書は見当たりません。そこで、人間工学的視点に立ったより良い自動車の研究開発が効果的かつ効率的に行われることに貢献するために、実用的かつコモンセンスとして知っておくべき知識を網羅した、いわばバイブルとなるものを目指しました。また、我が国では人間工学を系統的に学ぶ機会が限られていることから、適切に人間工学的なアプローチが遂行できるためのガイドブックとしても使えるように心がけました。

自動車人間工学は、設計指針として確立している課題から研究段階の state of the art な課題まで様々なレベルのものがあります。法規・工業規格・標準・ガイドラインがあるものについては、それらを紹介しています。また、人間工学的評価のための評価手法あるいは計測手法がある程度確立されているものがある場合にはその解説をしています。一方、まだ研究レベルのもの、あるいは経験的に人間工学的なデザインをしているものは事例紹介的な内容になっています。これによって、先達に学んでそれを今に活かすものが何で、これから取り組まなければならないものが何であるかが、読者に理解していただくことができ、将来への道筋が見えていくことを期待するものです。

人間工学の対象は多岐に渡ることから、内容に正確を期するために、それぞれを専門とする 100 名以上の方々に執筆をお願いしました。皆様お忙しいなか、これまでの知識・経験を文書の形にいただいたことに大変感謝しております。執筆者の方々の努力が将来の自動車人間工学の発展に寄与するものと確信しています。

2016年3月

人間工学編 編集委員会  
委員長 赤松 幹之